京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を

株式会社　京都建築事務所
代表取締役社長　細見 建司

〒604-8083
京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地
TEL:075-211-7277
FAX:075-211-7270
http://www.kyoto-archi.co.jp/

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

第 11 回 釜ヶ崎のまち短期留学

日時：7月12日（金）10時～17時ごろ

テーマ：変容する日雇い労働者のまち釜ヶ崎

―なぜ、いま釜ヶ崎に注目するのか―

参加費：7,000 円（障害者・学生 6,000 円／昼食代込）

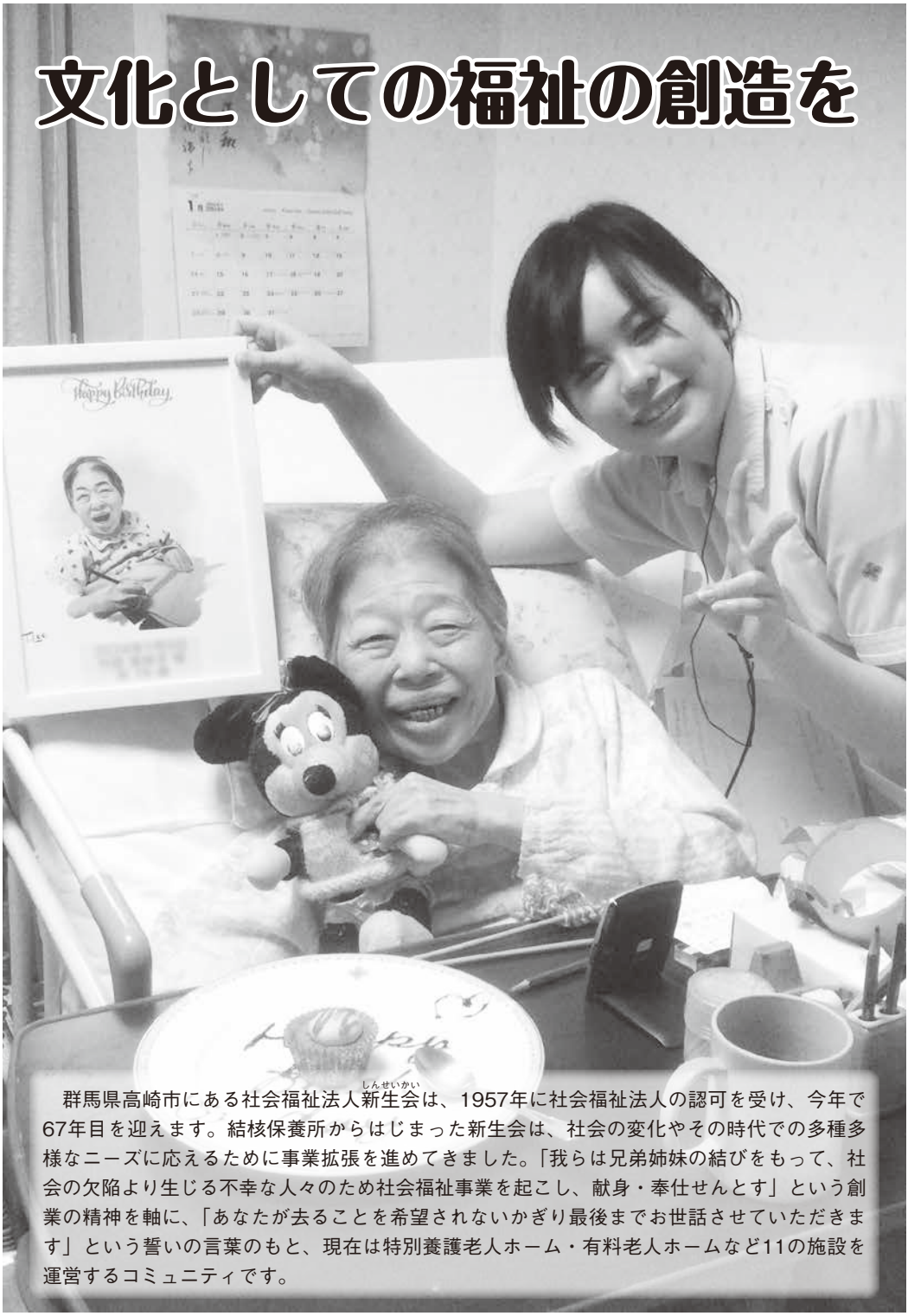
〈スケジュール〉※予定

10：00―12：00　釜ヶ崎まち歩き（水野阿修羅さん）
13：20―14：20　荘保共子さん（認定 NPO 法人こどもの里　理事長）
14：40―15：25　小林大悟さん（認定 NPO 法人釜ヶ崎支援機構　事務局長）
15：30―16：15　白波瀬達也さん（関西学院大学人間福祉学部　教授）
16：20―16：50　小林大悟さん・白波瀬達也さん　質疑応答

〈問合せ〉総合社会福祉研究所
TEL06-6779-4894　FAX06-6779-4895
ホームページ：http://www.sosyaken.jp/
E-mail：mail@sosyaken.jp

申込みはこちらから →

文化としての福祉の創造を



群馬県高崎市にある社会福祉法人新生会（しんせいかい）は、1957年に社会福祉法人の認可を受け、今年で67年目を迎えます。結核保養所からはじまった新生会は、社会の変化やその時代での多種多様なニーズに応えるために事業拡張を進めてきました。「我らは兄弟姉妹の結びをもって、社会の欠陥より生じる不幸な人々のため社会福祉事業を起こし、献身・奉仕せんとす」という創業の精神を軸に、「あなたが去ることを希望されないかぎり最後までお世話させていただきます」という誓いの言葉のもと、現在は特別養護老人ホーム・有料老人ホームなど11の施設を運営するコミュニティです。

コミュニティのなかには診療所もあって
多職種で連携しています

私たち新生会のこだわりは、ホームに住まわれる方々が「生き生きと創造的」に歳を重ねていくためのサポートをさせていただくことです。新生会のコミュニティにおける福祉のあり方やケアに対する考え方を、新生会理事長の原慶子は次のように述べています。

「私たちにとって『福祉』とは、人が生き生きと生きることです。これは誕生から死に至るまで、その人が唯一無比の個性を活かしきるということなのです。そこに創造があり、その総体が文化です。真の文化は真の人を造ります。真の人によって支えられる福祉の仕事、それが『文化としての福祉』です」（新生会60年史より）。

クラブ活動も多種多様にあり、施設を越えての交流が活発

季節行事を通じて生活のなかで変化と交流を楽しまれています

「生き生きと創造的に人生を歩む」ために、私たちは入居者と職員としての関係だけではなく、私とあなたの関係性を大切にして、「支え合う」（Care）・「分かち合う」（Share）・「育み合う」（Culture）なかで生まれる愛を基としたケア実践を積み重ねています。新生会では「介護」という言葉は使わず、「ケア」という言葉を使い、「ケア」を通して入居者と私たちの人間的な成長をめざしています。人と人がきちんと向き合うなかで生まれる関係性を大切にすることで、入居者と職員の双方が互いに高め合う存在として交わり、心ゆたかに自分らしくあり続けることができます。そうしたなかで、新生会のコミュニティでは、入居者も職員も生き生きと自分らしく過ごしています。

今年で29回目になる社会福祉研究交流集会が、８月末に東京で開催されます。年明けより実行委員会が組織され、当日に向けての準備が着々と進んでいます。全国で活躍される保育・障害・高齢の各分野での実践者と、当事者・家族、研究者の方々が集うこの交流集会。これからの社会福祉実践において大切な学びの場であることはもちろん、全国の仲間と交流がもてる貴重な時間になると思います。

参加される方々にとって実りある交流集会となるよう、実行委員が気合を入れて準備を進めています。全国で活躍されている社会福祉実践者と研究者のみなさん、夏に東京でお会いできることを楽しみにしております！

（写真・文　社会福祉法人新生会　若林　毅（たかし））

福祉のひろば
2024年6月号

【ひろばトーク】
子どもたちの将来を守るために必要なのは大人の成長 松下　祥貴　6

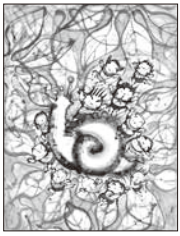
●特集●　能登半島地震　被災地からのレポート〈前編〉
「能登に帰りたい」に、ソーシャルワーカーとして
どう向き合うか　黒岡　有子　12
日常を取り戻すための支援を
——きょうされんの被災地支援から　塩田千恵子　16
大震災を経験して思うこと　本田　雄志　20
能登被災地の女性たちは今　仁藤　夢乃　24
1.5次避難所での支援活動から〈前編〉　櫻庭　葉子　28
〈投稿〉能登半島地震災害支援募金活動に参加して
松尾　喜生　32

●トピックス●
「権利としての福祉」を守り、大切にするなかまを増やしたい
——第１回全国版「ゆめかな」開催の目的とこれから　36
台湾における“原住民ソーシャルワーク”　黄　盈豪　40
障害がある人の人権を考える　藤井　克徳　44

●連載●
なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場
自立までの道のりとこれから　永里よしみ　52
続・ヘルパー歳時記
「できる」が「したい」に。あたりまえの生活を取り戻す①　56
WORK WORK——わくワク——
廃棄食材をおかきでおいしく！　アトリエ・ポルト　60
ＪＯＢ＆ＡＣＴＩＯＮ　全国福祉保育労働組合（39）
３・14 賃上げ・増員アクションで政府交渉を実施！　62
私の履歴書　社会福祉経営全国会議（39）
原点は共同保育所——認可運動で学んだこと　奥　正代　64
阿修羅がゆく　わたしが好きな釜ヶ崎（59）　水野阿修羅　66
育つ風景
子どもが思うようにならないとき、「困る」ことの価値　清水　玲子　68
映画案内　『PLAN 75』　吉村　英夫　70
現代の貧困を訪ねて　生田　武志　72
フィリピン・セブ島の貧困地域を訪ねる
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
似顔絵で夢をかなえるのじゃ！　ラッキー植松　74
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
花咲け！　男やもめ　川口モトコ　77

＊お知らせ＊　第29回社会福祉研究交流集会in関東　34
みんなのポスト　50／福祉の動き　78／今月の本棚　81
●グラビア●　文化としての福祉の創造を

●表紙の絵●
神門やす子



ひろば トーク

子どもたちの将来を守るために必要なのは大人の成長

NPO法人ろーたす理事長　松下　祥貴

僕は、中学校の先生になるのが夢でした。しかし、親がいない家庭のたいへんさや自身の闘病体験をふり返るなかで、「一番困っている子どもたちの役に立ちたい」と思い、児童養護施設高鷲（たかわし）学園に就職しました。入職後すぐに幼児フロアに配属され、かなり戸惑いました。そんなときに先輩職員から「入職していきなり幼児フロア担当はたいへんやと思うけど、がんばりや。はじめに幼児さんと関わっとくのはすごく大事やから」と言われました。いま、おもに学童期の子どもたちと関わるなかで、幼児期の子どもたちと関わった経験があったからこそ、その子の生い立ちをふり返る視点をもつことができ、先輩が言ってくれた「幼児期の子どもたちと関わる経験の大切さ」を日々実感しています。

楽しく学びの多い時間を過ごすことのできた高鷲学園での三年間は、子どもと関わる仕事をするうえで、僕の原点となっています。当時、施設内には学校に行かない子どもたちが何人もいました。「このような子たちが世の中にたくさんいるのか。この子たちが毎日楽しく教育を受けられる場所を増やしたい」との思いから、フリースクールの設立を決意しました。

法人名の「ろーたす（蓮の花）」は、泥の中だからこそキレイな花を咲かせることから、子どもたちが大人になったとき、「たいへんな思いをしたからこそ今がある！」と感じてほしいとの思いからつけました。どんな生い立ちや背景を背負っていても、自分のもっている可能性を社会のなかで最大限に発揮できる人になってほしいとの思いで、「一人一人の自己実現」との理念を掲げています。

ろーたすでは、異年齢の子ども同士で混ざり合うことを大切にしています。西成・釜ヶ崎での炊き出しなどのボランティア活動や、地域の方や他団体と協働した運動会な

まつした　よしたか

大阪市住吉区を拠点に不登校や困窮世帯の子ども達のサポートをしている、NPO法人ろーたすの理事長。最近はまっているのはサウナ。けれど、行くと体調が悪くなるのが悩み。

ど、さまざまな体験を通して「目に見えない力」を養っています。この「混ざる」「体験する」「たくさんの人とつながる」ことが、いまの子どもたちの課題を緩和させる重要なアプローチではないかと考えています。

現代社会は、インターネットやスマートフォンの登場でとても便利になるいっぽう、苦労せずとも何でも手に入る時代になってしまいました。環境が整いすぎて、人間同士の関わりのなかで学ぶ機会が奪われ、何かに挑戦する機会が減少していると感じます。その結果、子どもたちは達成感を得られないまま成長し、夢をもつこと、人生に希望をもつことができない子が多いように感じます。

子どもたちの心の中で育まれる「目に見えない力」は、学力とは違って点数にすることもできないし、成長を実感しにくいかもしれません。しかし、この力は子どもたちが前に進むためのアクセル・ガソリンの役割を担っており、すべての基礎になる力とも言い換えられます。今年度からは、地元の大学の先生がアドバイザーとして、「目に見えない力」を養うためのカリキュラムを監修してくださることとなりました。自分の人生に希望をもって生きることができる、「なりたい自分」に向かって精一杯努力することができる。そんな子どもたちが一人でも多くなれば、社会は少しずつ良い方向に動き出すのではないかと考えています。

ろーたすは法人として六年目を迎えることができました。多くの方々に支えていただいたことへの感謝を忘れることなく、「まずは大人が成長する姿を見せて、子どもたちに希望をもってもらう！」ことを強く意識しながら、僕もスタッフも自分の人生を一生懸命に生きていきたいと思います。

特集

被災地に寄り添うということ

元日に発生した能登半島地震から、五月一日で丸四か月が経過しました。しかし、いまなお四六〇〇人あまりが、各市町村に開設された一時避難所や、ホテル・旅館などの二次避難所で、避難生活を余儀なくされています。車中避難や在宅避難、農業用ビニールハウス内などで自主避難をされている人の数は把握されていないので、実際にはもっと多くの人々が避難生活を強いられています。

一・五次避難所として設置されているいしかわ総合スポーツセンターには、五月一日現在でいまだ九九人が避難生活をされています。高齢者や障害者など見守りや介護が必要な人を優先的に受け入れ、二次避難までの一時待機ステーションとして開設された避難所であるにもかかわらず、なかには三か月以上にわたり滞在している人もおられるとのことです（五月一日、ＭＲＯ北陸放送）。

倒壊した住宅や店舗の解体も、なかなか進んでいません。水道管の復旧が大々的に報道されていますが、家の敷地内の配管が故障しているため水道が使えず、修理業者の予約が二か月待ちのため、自宅に帰れない人もたくさんいます。

県が建設する仮設住宅は、四月末時点で三三六八戸が完成していますが、いまだ必要と考えられる戸数の約半数です。県は八月までに希望する被災者全員が入居できうるよう建設を進めたいとしていますが、それはつまり、あと三か月以上、避難生活を強いられる人がいるということです。

今号の特集でレポートを寄せてくださったみなさんが指摘しているように、半島という地理的な要素や

過疎・高齢化という特性が、地域と暮らしの再建がなかなか進まない一つの要因ではあると思います。しかし、現地で支援に関わられたみなさんのお話からは、政策的に、意図的に自助を強いているのではないかと思われる状況が、いたるところで散見されます。

総合社会福祉研究所・福祉のひろばとつながりのある、被災地にお住まいの方にレポートを呼びかけたところ、ソーシャルワーカーの黒岡有子さんは、限界集落である地域の再建に力をいれるべきかという意見があることにも触れながら、やはり、「能登に帰りたい」という一人ひとりの願いに寄り添いたいと、思いを寄せてくださいました。

櫻庭葉子さんは、いしかわ総合スポーツセンターでの支援に入った際、大手介護企業のサブリーダーから、「（避難者を）甘やかさないでください」「居心地良くしないでください」と言われたことを紹介し、被災した人にまずは寄り添うのではなく、自立・自助を求めることの問題の深刻さを指摘しています。

一般社団法人Colaboの仁藤夢乃さんは、非常時の状況が何か月もつづき、つねに我慢を強いられるなかで、被災者のなかで「あきらめ感」がまん延していること、そうしたあきらめが主体的に行動する力を奪い、それは福祉の衰退につながることを指摘しています。

国や行政をあげて被災地に寄り添うことをしないまま、当然のニーズを〝わがまま〟とし、我慢とあきらめを強いる。「みんなたいへんなのだから」と個別支援を否定し、行政が決めた枠から外れた主体的な行動を自己責任として支援対象から外す。そうしたことの先にあるのは、まさに福祉の衰退であり、自治の崩壊だと思います。今号と次号の特集二回にわたって、一人ひとりのいのちと暮らしを守るために私たちができること、しなければいけないことを考えたいと思います。

（編集主任　申）

※特集のレポート・取材については、執筆された時点、お話をうかがった時点での状況です。ご了承ください。